

女王と毒入りワインの杯
 —— *Hamlet* における忘却と記憶術 ——

滝 川 睦

I

『ハムレット』(*Hamlet*, 1601年頃制作)¹⁾五幕二場。Hamletを死に至らしめんと、Claudiusが画策した、細身の剣(rapier)と短剣(dagger)を用いての試合の場である。Hamletに対するはLaertes。この場面には、本劇研究史においてほとんど研究者たちの特別な注目を集めてこなかった台詞がある。毒入りワインの杯を、女王Gertrudeが口に運ぼうとするときの台詞である。

QUEEN. Here, Hamlet, take my napkin, rub thy brows.

The Queen carouses to thy fortune, Hamlet.

HAMLET. Good madam.

KING. Gertrude, do not drink.

QUEEN. I will, my lord, I pray you pardon me.

She drinks [and offers the cup to Hamlet].

KING. *[aside]* It is the poison'd cup. It is too late. (291-96)

HAMLET. How does the Queen?

KING. She swoons to see them bleed.

QUEEN. No, no, the drink, the drink! O my dear Hamlet!

The drink, the drink! I am poison'd. *Dies.* (314-16)

「毒薬」(poison)や「決闘」(duel)の概念やシンボリズムに焦点を合わせて、本劇の五幕二場を詳細に論じている、『毒薬、芝居、決闘』(*Poison, Play, and Duel*)の著者Nigel Alexanderでさえ、Gertrudeのこの場における台詞が、Hamletに対する警告であると同時に、王の悪巧みを暴露するLaertesの告白を引きだすきっかけとなっていることを指摘するのみである(157, 195)。確かに、毒入りワインをあおる女王の宣言に対して王はなすすべがないし、進んで阻止しようとしめないことにAlexanderは着目しているが(194)、目の敵であるHamletを殺害して、王権を安定化させるために催した試合の場で、女王がよりによって二度も王の言葉に耳を傾けず自分の意思を発現させている点には注意を向けていないのである。毒の塗られた真珠が

「和合」(“union” 269, 331) と名付けられている点に注目し、われわれにこの「和合」こそが王と女王の結婚を破綻させるだけでなく、かつて「和合をもたらす者／寡婦資産を有する女性」(“Th'imperial jointress” 1.2.9) であったはずの、女王の命を奪うという皮肉に気づかせてくれるのは A. C. Bradley そして Arden 版 *Hamlet* の編者 Harold Jenkins である (Bradley 122; Jenkins 414)。しかし、彼らもまた女王が、この場面で王の言葉に備わる男性権威を払いのけている点には触れてもいないのである。

この場の Gertrude の身振りに潜む謎を解くためには、女性がワインの杯を片手に気炎を揚げ、男性の権威を、そして男性優位の家父長制社会を徹底的に嗤ってみせる小冊子が、*Hamlet* が制作されたのと同時代に出版されていることにまず注目しなければならないだろう。Samuel Rowlands の筆になる『女三人集えばいと楽し』(*Tis Merry When Gossips Meet*, 1609年) である。表題の “Gossips” とは、「気心の知れた女友達」のことであり、本パンフレットでは「寡婦」(“Widow”)、[妻] (“Wife”)、そして「娘」(“Mayde”) の三人を指している。彼らが集う場所は、London の、とある「居酒屋」(“Taverne” 29)。彼女たちはワインの杯を片手に、世間話に花を咲かせる。ダガー・パイ (dagger pie)、ハトやガチョウの肉などの食事の話から、熱爛にした、砂糖入りのサックワインの話、さらには求婚、妊娠の話題、夫談義、かつて自分が仕えていた女主人が病を患い、Kent に療養に出かけていた時、どんな具合に自分が羽を伸ばせたかについての「寡婦」の自慢話、そして夫のを見つけ方や操縦の仕方に関する、「娘」へのアドバイスにいたるまで、彼女たちの話は尽きるところを知らない (O'Malley 15)。

Susan Gushee O'Malley によれば、この小冊子に登場する「妻」が属している市民階級の女性たちが、公共圏とでも言うべき「居酒屋」に集ってワインを酌み交わすことは、当時「居酒屋」が一般市民より上の階級の者たちにワインを提供する場であったことを考えると、市民階級に属する彼女たちにとって一種の願望充足的な振る舞いであったようである。彼女たちは実際には、「エールハウス」(alehouse) でビールの洋杯^{カップ}を傾けるのが普通であったと考えられるからである (O'Malley 13-14)。しかし「居酒屋」にしても、「エールハウス」にしても、当時女性たちがワインを片手に、世間話をするのできる公共圏が実際、存在したことは間違いないらしい。1599年に英国に滞在したスイスの人文学者 Thomas Platter は、『イングランド旅行記』(*Thomas Platter's Travels in England 1599*) に「男性同様、女性も実にしばしば居酒屋やエールハウスに喜んで出かける。彼女たちはそれらの場所に招かれ、砂糖を添えたワインを供されることを大なる榮譽と考えている。一人の女性が招待されただけであるにもかかわらず、三人か四人の女性を同伴し、ご機嫌に互いに乾杯しあうのである。招待された妻の夫は、妻を招待し酒を振る舞った男にのちにお礼を言う。というのも、夫婦はその招待を心からのもてなしと捉えているからである」と記しているからである (Platter 170)。

そして *Tis Merry When Gossips Meet* で吐かれる女性たちの気炎の基調となっているのは、

次の引用にあるように、男性の権威をこき下ろすことであり、嗤いのめすことである。

Mayde You are to blame, in truth, we drinke like men,
Now by my truely I am e'ne ashamed,
Widdow Tut wench, God knowes when we shall meet agen:
Nor need we feare of husbands to be blamed;
Our cent of wine shall not by them be felt,
The married wife in kissing will be smelt.

Wife Oh Couz, if that be all the worst, I care not,
Ile take allowance even with the best:
This Cup to you, you shall not say I dare not:
My husband smell? Oh Jesu! there's a jest,
I care as little for my husbands smelling,
As any wench this houre in London dwelling.

(*Tis Merry When Gossips Meet* 33)

夫が非難しようが、酒を飲んだことを夫に気づかれようが、そんなことはお構いなし、「酒を飲んでいるところを恋人や求婚者にみられる恐れもなし、たっぷり時間と酒があるのだから、しっかり楽しみましょう」(*Tis Merry When Gossips Meet* 30) というわけである。

Hamlet が制作されたと推定される年から数年遅れてこのパンフレットは出版されたわけであるが、Shakespeare は間違いなくこのような女性たちが酒場集って形作る、女性上位の公共圏を知っていたはずである。なぜなら彼は *Hamlet* 制作に先立つ数年前に、『じゃじゃ馬ならし』(*The Taming of the Shrew*,²⁾ 1594年頃制作) の大団円において *Tis Merry When Gossips Meet* において描かれるような、女性が男性を尻に敷く場を表象／再現しているのであるから。

The Taming of the Shrew (*Shr.* と略す) 五幕二場。新婚夫婦三組が揃って Baptista 家の宴の席 (“a banquet” 5.2.0.5 SD) に臨む。Lucentio と Bianca, Petruccio と Katherina、そして Hortensio と寡婦 Widow である。*Tis Merry When Gossips Meet* とは違って、この宴には新郎も含めて男性たちも勢揃いしているが、やはりここでも主役は、杯をもった三人の女性たちなのである。そして寡婦も Bianca も、Rowlands が描く女性たちと同様に、男性の権威を形無しにしようとする――

PETRUCCIO. Now, for my life, Hortensio fears his widow.
WIDOW. Then never trust me if I be afeared.
PETRUCCIO. You are very sensible, and yet you miss my sense:
I mean Hortensio is afeard of you.
WIDOW. He that is giddy thinks the world turns round. (*Shr.* 5.2.16-20)

LUCENTIO. Go, Biondello, bid your mistress [Bianca]

come to me. . . .

How now, what news?

BIONDELLO. Sir, my mistress sends you word that she is

busy, and she cannot come.

(*Shr.* 5.2.78-79, 83-85)

皮肉なことに、女性が従順であることの必要性をこんこんと説く、“Fie, fie, unknit that threatening unkind brow” で始まる、Katherina の、男性上位社会を言祝ぐあの有名な台詞 (5.2.142-85) が印象的であるのも、上のような、女丈夫たちが語る、男の顔色を失わせる台詞や挙措が存在しているからなのである。

Hamlet 五幕二場において、国王の「ガートルード、飲むでない」(294) という言葉を振り切って、Gertrude が「いただきますわ」(295) とワインの杯を手にする時、彼女は *Tis Merry When Gossips Meet* の喜劇的世界に身を置かずとも、杯を片手に男性の権威を袖にし、嗤ってみせる、女丈夫たちの系譜に連なっているのである。

II

ワインの杯を片手に男性の権威を失墜させる、英国ルネサンス期の女性像を前章で確認したが、この章では飲酒と忘却の関連性に焦点を合わせながら、杯を口に運ぶ Gertrude 像に迫ってみたい。

本劇の五幕二場が、決闘（試合）の場であると同時に、「ワインの酒瓶」(“*flagons of wine*” 263 SD) と杯 (“the stoups of wine” 264) が並べられた宴の席であることは注目に値する。なぜならば、次の引用が明らかにするように、本劇の舞台である Denmark 王国は、饗宴の国として冒頭から描かれているのだから。宴会で幕を開ける本劇は、やはり宴会で幕を閉じるのである。

HAMLET. The King doth wake tonight and takes his rouse,

Keeps wassail, and the swagg'ring upspring reels;

And as he drains his draughts of Rhenish down,

The kettle-drum and trumpet thus bray out

The triumph of his pledge. (1.4.8-12)

Hamlet がこの台詞を述べた直後に述懐するように、こうした「酩酊した宴」(“heavy-headed revel” 17) は他国による Denmark 王国の評価を著しく貶めることになる。そしてさらに注目すべきなのは、劇中で饗宴が、本劇の最大のテーマのひとつである「忘却」としっかり結びついていることである。

HAMLET. Alas, poor Yorick. I knew him, Horatio, a fellow

of infinite jest, of most excellent fancy. He hath bore
me on his back a thousand times, and now—how
abhorred in my imagination it is. My gorge rises at
it. Here hung those lips that I have kissed I know not
how oft. Where be your gibes now, your gambols,
your songs, your flashes of merriment, that were
wont to set the table on a roar? (5.1.178-85)

「死を忘れるなかれ」(*memento mori*) というルネサンス的テーマを彷彿させる Yorick の髑髏を片手に、Hamlet は忘却の淵に沈んだ、自分が幼かった頃の宮廷、そして宮廷の宴を思い起こしている。

この場で Hamlet が実践している「記憶術」は、髑髏を片手にしてキリストの受難などを瞑想する、Ignatius of Loyola が創始した「霊操」(Spiritual Exercises) の一変奏であると同時に、Cicero や Quintilian など修辞学者たちが語る、古代ギリシャの詩人 Simonides が発見した古典的記憶術のヴァリエーションでもある (Cicero, *De oratore* 464-67; bk. 2, ch. 86; Quintilian 217-21; bk. 11, ch. 2)。Simonides の場合、双子の神 Castor と Pollux に呼び出された挙げ句、崩落する屋根の下敷きにならずにすんだだけでなく、客人たちが座っていた宴席を記憶の拠り所として、大勢の死者の身元を明らかにしたという逸話に具現化される、「場」を設定し、その「場」に記憶を係留しておく記憶術の原理を発見したのであるが、Hamlet も Yorick の髑髏を手にしながらか、「テーブル」(“table” 5.1.185) のまわりに集い、道化の芸にさんざめく、在りし日の宮廷人たちの姿を想起しているのである。

しかしここで問題なのは、いかにして Hamlet が古典的記憶術を駆使したか、ということではなくむしろ、Hamlet が記憶術を操り、忘却の淵から呼び起さねばならないほど、饗宴が本劇においては忘却と深く結びついているという点なのである。かつて Hamlet は祝祭そのものを「ホビーホース(棒馬)」と表現し、「嗚呼、嗚呼、ホビーホースは忘却の淵に」(“For O, for O, the hobby-horse is forgot” 3.2.133) と劇中劇の最中に喝破していたのであるが、本劇においてはホビーホースならぬ祝宴こそが忘却の淵に沈んでいると言えよう。

酒が忘却と結びつくのは、なにも Hamlet に限ったことではない。そもそも記憶術に言及している当時の修辞学の書には暴飲暴食を避けることこそ、記憶力を高めるコツであるとしたためられているのである (Wilson 235; bk. 3)。記憶術の指南書である Marius D'Assigny の『記憶術』(*The Art of Memory*, 1697年)は次のような、印象的なエピソードを交えながら、飲酒と忘却の関係に鋭くメスを入れているのである。

Drunkeness is offensive to the Brain, and all its Functions, because it fills it full of Humours, and naturally causeth Forgetfulness. . . . Therefore the use of strong Wines is dangerous, and a frequent ingorging and constant Debauchery turns

Men into Sots and Beasts, and weakens all the Operations of the Brain. I cannot but mind here what *Suetonius* writes of *Claudius Cæsar*, that by Drunkenness he had forgot what he had commanded but an hour before: for having ordered his impudent and lecherous Wife and Empress *Messalina*, to be put to Death, because of her unsufferable and publick Adulteries, when he sat down to eat Meat a while after, asked his Officers and Servants what their Lady was doing, that she came not as usually to Table with him. (43-44)

D'Assigny が紹介しているのは、飲酒、とくに強いワインを飲むことは脳の働きを弱め、物忘れがひどくなることを警告しているのだが、そこで例として挙げられるのが、古代ローマの伝記作家・歴史家 *Suetonius* の『ローマ皇帝伝』(*De Vita Caesarum*, 英訳 *The Lives of the Caesars*) の中で語られる皇帝 *Claudius I* の忘却癖。過度の飲酒がわざわざいって彼は一時間前に命じておいたことさえ記憶にとどめておけなかったようである。ある日のこと、王妃 *Messalina* がいつものように食卓に姿を現わさないのを彼は不審に思い、王妃はどうしているか、と側近に尋ねたという。実は、肉料理を食べようと食卓につくほんの少し前に、姦淫の罪で王妃を殺害するように自ら命じておきながら、彼はそのことをすっかり忘れていたのである (*Suetonius* 73; bk. 5)。

Hamlet において、こうした忘却を体現する人物は、*Suetonius* が描く忘却の徒 *Claudius* と同じ名前を持つ、国王 *Claudius*。彼の場合も、上に引用した本劇一幕四場 8 行目から 12 行目の台詞で述べられているように、過度の飲酒癖が強調されている。ただし、ローマの皇帝と違うのは、王妃ではなく彼こそが、*Ghost* によって「姦淫の罪を犯した獣」(“adulterate beast” 1.5.42) と呼ばれていることと、そして本劇の *Claudius* の場合、レトリックを駆使して「忘却」を正当化しようとしていることである。

KING. Though yet of Hamlet our dear brother's death
 The memory be green, and that it us befitted
 To bear our hearts in grief, and our whole kingdom
 To be contracted in one brow of woe,
 Yet so far hath discretion fought with nature
 That we with wisest sorrow think on him
 Together with remembrance of ourselves. (1.2.1-7)

先王の死を悼むとしながらも、「分別」(“discretion”) や「このうえない賢明な悲しみ」(“wisest sorrow”) で武装しながら王権を盤石なものにしようとする。それだけでなく、先王の「思い出=記憶」(“memory”) を、「われわれ国民=国王」(“we”) のことを「忘れないこと」(“remembrance”) によって逆説的に葬り去ることを、このしたたかなレトリックは狙いとしている。「ラインワイン」(“Rhenish” 1.4.10) の大杯を片手に、忘却のレトリックを自家薬

籠中のものとして、Claudius は先王の記憶を忘却の淵に沈めているのである。

III

英国ルネサンス期において、暴飲暴食と同じように記憶の大敵とされる存在があった。夫に先立たれた寡婦である。Shakespeare と同時代の劇作家 John Webster の筆が一部加わっているとされる『人間三十二態』(*Characters*, 1615年)は、「普通の寡婦」(“*An ordinarie Widdow*”)を次のように記している。

[An ordinarie Widdow] [ils like the Heralds Hearse-cloath; shee serves to many funerals, with a very little altering the colour. The end of her husband beginnes in teares; and the end of her teares beginnes in a husband. . . . Lastly, while shee is a Widdow, observe ever, shee is no Morning woman: the evening a good fire and Sacke may make her listen to a Husband: and if ever shee bee made sure, tis upon a full stomacke to bedward. (39)

未亡人は、棺にかけられた伝令官の布と同じ。多くの葬式に用いられるのだが、これっぽっちも色は変わらないから、というわけである。夫を亡くして涙を浮かべたかと思うと、再婚して涙をぬぐう。そしてやはり彼女の片手にはしっかりとサックワイン (“Sacke”) の杯がにぎられているようである。

「普通の寡婦」が棺にかけられた布の比喩で表されるのに対して、「有徳の／貞潔な寡婦」(“*A vertuous Widdow*”)は棕櫚の木として表現される――

[A vertuous Widdow] [ils the Palme-tree, that thrives not after the supplanting of her husband. For her Childrens sake she first marries, for she married that she might have children, and for their sakes she marries no more. She is like the purest gold, only imploid for Princes meddals, she never receives but one mans impression; the large jointure moves her not, titles of honor cannot sway her. To change her name were, shee thinks, to commit a sin should make her asham'd of her husbands Calling; shee thinks shee hath traveld all the world in one man; the rest of her time therefore shee directs to heaven. Her maine superstition is, shee thinks her husbands ghost would walke should shee not performe his Will (38)

「普通の寡婦」が忘却の化身であるのに対して、「有徳の／貞潔な寡婦」は追憶・記憶の化身として描かれていると言ってさしつかえないだろう。

そして *Characters* において活写されている「有徳の／貞潔な寡婦」の背景には、その英訳が1529年頃から1592年にいたるまで9回版を重ねた、寡婦や他の女性たちの理想像を提示し

た、スペインの人文学者 Juan Luis Vives の『女性キリスト教徒のための教本』(*De Institutione Foeminae Christianae*, 1524年, 英訳 *The Instruction of a Christen Woman*, 初版 1529年頃) が控えていることは間違いない。Vives は、亡き夫の死を篤く悼み、彼の記憶を心の拠り所として、貞潔なる余生を送る女性を理想的な寡婦として描いているが、その一節はまさに Webster の「有徳の／貞潔な寡婦」を思わせる書きぶりなのである。

Wherefore a good wydowe ought to suppose, that her husbände is nat utterly deade, but lyveth, both with lyfe of his soule, whiche is the very lyfe, and besyde with her remembraunce. For our frendes lyve with us, though they be absente from us or deade, if the lyvely image of them be imprinted in our hartes, with often thynkyng upon them, and dayly renewed, and theyr lyfe ever waxe fresshe in our myndes. And if we forgette them, than they dye towarde us. . . .

. . . Lette her kepe the remembraunce of her husbände with reverence, and nat with wepyng. . . . (167-68)

翻って、*Hamlet* の Gertrude の場合、「有徳の／貞潔な寡婦」が実践するようには先夫の「遺志=遺言」(“Will,” Webster, *Characters* 38) を受け継いで、Vives が唱えるところの理想的寡婦となることはない。いや、それどころか、先夫のことも息子のことも失念したかのように急いで再婚する。結果、Webster の *Characters* で語られる「夫の霊」(“husbands ghost” 38) ならぬ、先王の「亡霊」(Ghost) が Elsinore 城を彷徨うこととなるのである。

HAMLET. Why, she [Queen] would hang on him [King Hamlet]

As if increase of appetite had grown

By what it fed on; and yet within a month—

Let me not think on't—Frailty, thy name is woman—

A little month, or ere those shoes were old

With which she follow'd my poor father's body,

Like Niobe, all tears—why, she—

O God, a beast that wants discourse of reason

Would have mourn'd longer—married with my uncle (1.2.143-51)

Hamlet にとって母 Gertrude は、Claudius の妃というよりは、寡婦として存在していると言ってもいいだろう。そして Hamlet の目に映った Gertrude はまさしく、*Characters* に描かれる「普通の寡婦」そのものなのである。

従来 Gertrude は、次に引用する John Webster 作の『モルフィ公爵夫人』(*The Duchess of Malfi*, 1614年頃制作) の台詞が明示しているような、英国ルネサンス期の社会や文学に典型的な、富裕で性的欲望が強い寡婦の典型として論じられることが多かった (Panek 5-8; Erickson 153)。だがしかし、われわれは本劇を解説する際に、当時の言説でまことしやかに説かれてい

た、忘却の具現化としての寡婦像も忘れてはならないのである。

FERDINAND. You [The Duchess] are a widow.

You know already what man is, and therefore

Let not youth, high promotion, eloquence—

CARDINAL. No, nor anything without the addition 'honour'

Sway your high blood.

FERDINAND. Marry? They are most luxurious

Will wed twice.

(*The Duchess of Malfi* 1.2.209-14)

近代初期英国演劇を舞台にした寡婦と忘却の関連性を照射するのに、同時代の劇作家 Thomas Heywood の筆になる、『演劇擁護論』(*A Defence of Drama*, 1608年?) の次のような一節ほど適切なものはないだろう。

At Lynn, in Norfolk, the then Earl of Sussex's players acting the old history of *Friar Francis*, and presenting a woman who, insatiately doting on a young gentleman, the more securely to enjoy his affection mischievously and secretly murdered her husband, whose ghost haunted her; and at divers times, in her most solitary and private contemplations, in most horrid and fearful shapes appeared and stood before her. As this was acted, a towns-woman, till then of good estimation and report, finding her conscience at this presentment extremely troubled, suddenly screeched and cried out, 'Oh! my husband, my husband! I see the ghost of my husband fiercely threatening and menacing me!' At which shrill and unexpected outcry the people about her, moved to a strange amazement, inquired the reason of her clamour; when presently, un-urged, she told them that seven years ago she, to be possessed of such a gentleman (meaning him), had poisoned her husband, whose fearful image personated itself in the shape of that ghost. (498-99)

劇というフィクションが現実を模倣するというよりはむしろ、現実がフィクションを模倣するかのような印象を与えるこの逸話を再現=表象することは、Heywoodにとって、演劇はかくのごとく良心に揺さ振りをかけ、道徳的感化力を持っているのだということを例証するために欠かせぬ手続きであったようである。にもかかわらず、ルネサンス期の忘却と寡婦との関連性を探ってきたわれわれにとっては、それとは別の解釈をこのエピソードに添えることもできるだろう。つまり、演劇という記憶覚醒装置を用いなければ、夫殺害の記憶を蘇らせることができないほど、この寡婦の忘却は深かったということである。

Heywood が紹介する逸話中の芝居は、*Hamlet* 三幕二場で国王の前で演じられる、『ゴンザーゴ殺し』(*The Murder of Gonzago* 2.2.532) あるいは『ネズミ捕り』(*The Mousetrap*)

3.2.232) と名付けられた劇中劇によく似ている。先王毒殺の罪を犯した Claudius の良心に、芝居を利用して揺さ振りをかけ、罪を告白させるために仕組まれたものだからである。

PLAYER QUEEN. *In second husband let me be accurst;*

None wed the second but who kill'd the first.

.....

The instances that second marriage move

Are base respects of thrift, but none of love.

A second time I kill my husband dead,

When second husband kisses me in bed. (3.2.174-75, 177-80)

しかし、Heywood のエピソードに登場する罪人が、忘却の淵にのまれた寡婦であったことを知っているわれわれは、Hamlet が仕掛ける、劇中劇という記憶装置の標的が、Claudius であると同時に Gertrude でもあったことに気付かされるのである。

IV

これまで、英国ルネサンス期における酒、忘却、そして寡婦の関連性に焦点を合わせながら、*Hamlet* における Gertrude 像に迫ってきた。ここで、冒頭の問い、つまりなぜ Gertrude は毒入りワインの杯を手にしながらか絶命するのかという問題に戻ってみよう。

「ガートルード、飲むでない」(5.2.294) という Claudius の言葉をさえぎり毒杯を口に運ぶ時、そして「妃は、血を見て気が遠くなっているのだ」(“She swoons to see them bleed” 314) という悪事を隠蔽しようとする彼の言葉を、「いいえ、違いますわ、酒よ、酒に毒が」(“No, no, the drink, the drink!” 315) と真っ向から否定してみせる時、五幕二場において Gertrude は間違いなく、*Tis Merry When Gossips Meet* に描かれた、ロンドンの居酒屋で、気炎を揚げて男性の権威を虚仮にする “Widdow” や “Wife” の眷族となっていると言えよう。

しかし、Ⅱ章とⅢ章で確認したように、近代初期英国において酒にしても、寡婦にしても忘却を加速させる働きをもっていたことを思い出すならば、ここで Gertrude がワインの杯を持つことで、忘却の化身としての己の姿をさらに鮮明なものにしていると言えるのだろうか。答えは、否である。彼女の上の言葉がきっかけとなって Hamlet に、「わしのことを忘れるでない」(“Remember me” 1.5.91) という Ghost の厳命を想起させ、復讐を成就させるからである。

かつて筆者は、*Hamlet* における記憶術と霊操との関連について考察した別の論文において、Cicero の筆になると推測されてきた、古代ローマの修辞学書『ヘレンニウスによせて』*Ad C. Herennium* における、記憶術の実践例について述べた一節に関して、次のように述べたことがある。

中世・ルネサンスの記憶術に絶大な影響力を及ぼした *Ad Herennium* の著者はこ

う語る——遺産めあてに毒殺をおこなったと嫌疑をかけられている男を、われわれは弁護しなければならないと仮定しよう、われわれが記憶術を使って銘記しておかねばならないのは、毒殺者と被害者の似姿を配置した、次のような場景である。

We shall picture the man in question as lying ill in bed, if we know his person. If we do not know him, we shall yet take some one to be our invalid, but not a man of the lowest class, so that he may come to mind at once. And we shall place the defendant at the bedside, holding in his right hand a cup, and in his left tablets, and on the fourth finger a ram's testicles. In this way we can record the man who was poisoned, the inheritance, and the witnesses.

(215; bk. 3, ch. 20, 33)

毒殺容疑者の似姿の右手に握られているのは毒杯である。左手の「書字板」(“tablets”)は遺言もしくは遺産をあらわし、薬指につけられた雄羊の辜丸(testiculi)は音の連想から、事件の証人(testes)をあらわしている(214-15)。イメージの置かれる場所=寝台(寝室)、そして所持品=書字板、羊の辜丸という点では異なっている、^{アトリビュート}「活人画」(tableau vivant)あるいは「默劇」(dumb-show)にも似た、記憶術によって表象=再現されたこの毒殺の場景が、*The Murder of Gonzago* になんらかの影響を与えたことは十分にありそうなことである。(滝川 25)

しかし、英国ルネサンス期における酒、忘却、そして寡婦の関連性について考察してきたわれわれは、この解釈が不十分であることに気が付くのである。なぜならば、五幕二場の女王が絶命する場面もまた、上の *Ad C. Herennium* の記憶術の実践例と、かすかではあるが反響しあっているからである。ただし *Hamlet* の大団円においては、毒殺容疑者ではなく、Gertrude が毒杯を片手に持ち、杯の並べられたテーブルの前に座る。そして被害者となった彼女の姿を目に焼きつけながら、Hamlet は父親の遺言=遺志を現実のものとするべく、復讐に邁進していくのである。ワインの毒杯を片手に絶命する彼女の姿は、次の Hamlet の今際の台詞に示唆されているように、Hoartio や宮廷人には Hamlet に纏わる記憶 (“my story” 5.2.54) を、さらにわれわれ観客の心には、一大記憶装置としての本劇を記憶に留めておくための、^{よすが}縁となる図像でもあるのだ。

HAMLET. O God, Horatio, what a wounded name,
 Things standing thus unknown, shall I leave behind me.
 If thou didst ever hold me in thy heart,
 Absent thee from felicity awhile,
 And in this harsh world draw thy breath in pain
 To tell my story. (5.2.349-54)

キーワード：『ハムレット』、寡婦、忘却、毒入りワインの杯、記憶術

注

本稿は平成25年度 JSPS 科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）（基盤研究(C) 課題番号25370280）による「近代初期英国における寡婦・寡婦文学と若者文化との関連性についての歴史的研究」による研究の成果の一部である。

- 1) *Hamlet* に関しては、Harold Jenkins が編集した The Arden Shakespeare 版をテキストとして使用した。制作年については Alfred Harbage に従った。
- 2) *The Taming of the Shrew* に関しては、Barbara Hodgdon が編集した The Arden Shakespeare 版 3rd Ser. をテキストとして使用した。制作年については Harbage に従った。

引用文献

- Alexander, Nigel. *Poison, Play, and Duel: A Study in Hamlet*. London: Routledge, 1971. Print.
- Bradley, A. C. *Shakespearean Tragedy: Lectures on Hamlet, Othello, King Lear, Macbeth*. 1904. London: Macmillan, 1974. Print.
- [Cicero]. *Ad C. Herennium*. Trans. Harry Caplan. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1954. Print. The Loeb Classical Library.
- Cicero. *De oratore*. Trans. E. W. Sutton. Vol. 1. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1942. Print. The Loeb Classical Library.
- D'Assigny, Marius. *The Art of Memory*. 1697. New York: AMS, 1985. Print. Scientific Awakening in the Restoration 1.
- Erickson, Amy Louise. *Women and Property in Early Modern England*. London: Routledge, 1993. Print.
- Harbage, Alfred. *Annals of English Drama 975-1700*. Ed. S. Schoenbaum. Rev. ed. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 1964. Print.
- Heywood, Thomas. *A Defence of Drama. English Renaissance Literary Criticism*. Ed. Brian Vickers. Oxford: Clarendon, 1999. 474-501. Print.
- Jenkins, Harold, ed. *Hamlet*. London: Methuen, 1982. Print. The Arden Shakespeare.
- O'Malley, Susan Gushee. "A Shroe is ten times better then a sheepe": Samuel Rowlands's Gossip Pamphlets." *"Custom Is an Idiot": Jacobean Pamphlet Literature on Women*. Ed. Susan Gushee O'Malley. Urbana: U of Illinois P, 2004. 13-26. Print.
- Panek, Jennifer. *Widows and Suitors in Early Modern English Comedy*. Cambridge: Cambridge UP, 2004. Print.
- Platter, Thomas. *Thomas Platter's Travels in England 1599*. Trans. Clare Williams. London: Jonathan Cape, 1937. Print.
- Rowlands, Samuel. *Tis Merry When Gossips Meet. "Custom Is an Idiot": Jacobean Pamphlet Literature on Women*. Ed. Susan Gushee O'Malley. Urbana: U of Illinois P, 2004. 27-65. Print.
- Quintilian. *The Institutio oratoria of Quintilian*. Trans. H. E. Butler. Vol. 4. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1922. Print. The Loeb Classical Library.
- Shakespeare, William. *Hamlet*. Ed. Harold Jenkins. London: Methuen, 1982. Print. The Arden Shakespeare.
- . *The Taming of the Shrew*. Ed. Barbara Hodgdon. London: A & C Black, 2010. Print. The Arden Shakespeare. 3rd Ser.
- Suetonius. *The Lives of the Caesars. Suetonius*. Trans. J. C. Rolfe. Vol. 2. Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1914.

- 1-385. Print. The Loeb Classical Library.
- 滝川、睦. 「*Hamlet*における記憶術と霊操」 *IVY*. Vol. 26. 名古屋大学英文学会、1993年. 17-38頁. Print.
- Vives, Juan Luis. *The Instruction of a Christen Woman*. Trans. Richard Hyrde. ca. 1529. Ed. Virginia Walcott Beauchamp et al. Urbana: U of Illinois P, 2002. Print.
- Webster, John. *Characters. The Complete Works of John Webster*. Ed. F. L. Lucas. Vol. 4. 3-61. Print.
- . *The Duchess of Malfi*. Ed. Leah S. Marcus. London: A & C Black, 2009. Print.
- Wilson, Thomas. *The Art of Rhetoric (1560)*. Ed. Peter E. Medine. Pennsylvania: Pennsylvania State UP, 1994. Print.

Synopsis

The Queen and the Poisoned Cup of Wine: The Forgetfulness and the Art of Memory in *Hamlet*

By Mutsumu TAKIKAWA

The recent Shakespearean studies, especially those of *Hamlet*, have been inclined to discuss the problems of memory in his plays, focusing upon the significance of the memory in early modern England. This article, on the contrary, makes an investigation on the theme of forgetfulness in *Hamlet* from the historical viewpoints, paying a special attention to the relationship between Queen Gertrude as a "Widdow" and her failure of memory.

The conclusion is as follows: in spite of the fact that in the early modern England the widow was represented as the embodiment of forgetfulness, the figure of Gertrude holding the poisoned cup of wine in Act 5 Scene 2 can be interpreted not only as the mnemonic figure which reminds Hamlet of the order of Ghost, but also as a means to help remind us of *Hamlet* itself as an apparatus of the art of memory.

Keywords: *Hamlet*, the widow, forgetfulness, the poisoned cup of wine, the art of memory